

台北帝国大学予科「逍遙歌 高砂周遊の歌」関係資料一斑（六訂稿）

（令和 4（2022）年 7 月 12 日（火）現在）

〔目 次〕

|                                                             |    |
|-------------------------------------------------------------|----|
| （作成経緯）                                                      | 2  |
| 1 はじめに                                                      | 3  |
| 2 関係資料                                                      | 3  |
| 3 台北帝国大学予科 逍遙歌（高砂周遊の歌）歌詞の変遷過程                               | 5  |
| (1)（現行）台北帝国大学予科逍遙歌（高砂周遊の歌）（昭和 41 年時点）                       | 5  |
| (2) 逍遙歌（高砂周遊の歌）（昭和 19 年 9 月時点）                              | 6  |
| (3) 原逍遙歌（昭和 18 年 9 月時点）                                     | 8  |
| 【参考 1】下道郁子氏関係論稿                                             | 9  |
| 【参考 2】台北帝国大学予科関係歌                                           | 9  |
| 【参考 3】丹野義彦氏 HP「台北の旧制高校を歩いてみよう」                              | 9  |
| 【参考 4】『白線帽の青春 写真図説◆旧制高等学校 西日本篇』（国書刊行会、昭和 63 年 12 月 10 日刊）紹介 | 10 |
| 【参考 5】「昭和考古学とブログエッセーの旅」「台北帝国大学の歴史 前・中編【昭和考古学】」紹介            | 10 |

(作成経緯)

HP 初出: 平成 29 (2017) 年 9 月 3 日 (日) 初稿作成

平成 29 (2017) 年 9 月 22 日 (金) 改訂稿作成  
(誤植修正、一部修正、追加)

平成 29 (2017) 年 10 月 21 日 (土) 再訂稿作成  
(【参考 3】丹野義彦氏 HP 追加)

平成 29 (2017) 年 12 月 17 日 (日) 三訂稿作成  
(【参考 4】追加)

平成 30 (2018) 年 12 月 2 日 (日) 四訂稿作成  
(【参考 5】追加)

令和 4 (2022) 年 4 月 1 日 (金) 五訂稿作成  
(レイアウト全面変更、一部修正の上、『CD 版  
宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高  
橋由利子先生略年譜・著作目録【参考篇】【附篇】  
一ローマ法・法制史学者著作目録選(第十五輯)  
一』(令和 4 (2022) 年 4 月 1 日刊) に収録し  
た。)

令和 4 (2022) 年 7 月 12 日 (火) 六訂稿作成  
(一部修正、追加)

## 1 はじめに

周知のように台北帝国大学予科の「逍遙歌 高砂周遊の歌」（岩村光介・上原和・松村一雄・庄司義親作詞、斉藤信彦作曲）は日本統治期台湾の掉尾を飾る詩作として著名であるが、それが公表されたのは、戦後 20 年を経て刊行された『日本寮歌集』（日本寮歌振興会、昭和 41 年 10 月 10 日初版刊）においてであった。同書で作詞者の一人にして昭和 18(1943) 年 5 月に「逍遙歌」作成を構想した岩村光介氏（1922～2000、台大予科一回文科修了）が「付記」としてその経緯を解説している。その後は寮歌祭等で歌われ、ボニージャックスが歌った全国の寮歌集レコードにも収められて、人口に膾炙したものとなった。

先般忝くも長谷場義久氏（1924～（2019）、台大予科一回文科修了）の格別の御高配、御示教を得て本平成 29（2017）年 2 月 9 日に逝去された上原和博士（1924～2017、台大予科二回文科修了）の「台湾関係著作」の一部を整理する機会を得た（「上原和氏台湾関係著作抄（1）～（4・完）」『台湾協会報』第 750 号～第 753 号（平成 29 年 3～6 月刊）参照）<sup>1</sup>。その中で上原博士「逍遙歌 餞けの詩稿—高砂周遊の歌のこと—」『芝蘭—台北帝国大学予科創立五十周年記念誌—』（台北帝国大学予科創立五十周年記念誌編集委員会、平成 6 年 6 月 20 日刊）を久しぶりに再読することがあったことから、この際、本「逍遙歌 高砂周遊の歌」について関係資料だけでも取り敢えずまとめておきたく思った次第である。いずれも極めて興味深いものであり、これを契機に、同歌、ひいては終戦前後の在台日本青年史についての検討が進捗することを期待したい。ただし、掲載資料はあくまでも管見の限りであって、漏らしたものも多いことをお断りしておく。長谷場氏の御厚意に改めて深甚の謝意を表するものである。

（追記）長谷場義久氏におかれては、その後令和元（2019）年 9 月 10 日（火）長逝されました。謹んでお悔やみ申し上げますとともに、御冥福をお祈りいたしております。なお、『CD 版 宮崎道三郎博士・小林宏先生・西村稔先生・高橋由利子先生略年譜・著作目録【参考篇】【附篇】—ローマ法・法制史学者著作目録選（第十五輯）—』（令和 4（2022）年 4 月 1 日刊）所収【ファイル⑦-9】「上原和博士台湾関係著作抄（三訂稿）」中の「【参考 3】長谷場義久氏の御逝去を悼みて」参照。

## 2 関係資料

昭和 41（1966）年

・『日本寮歌集』（日本寮歌振興会、昭和 41 年 10 月 10 日初版刊、昭和 55 年 10 月 18 日改訂版刊、平成 3 年 10 月 5 日新装版刊）（台北帝国大学予科関係歌：例えば新装版 474～483 頁、「逍遙歌（高砂周遊の歌）」：同 480～481 頁。岩村光介氏解説執筆。同歌は同書で初めて公表された。）

---

<sup>1</sup>本HP別稿「上原和博士台湾関係著作抄」参照。（平成30年12月2日追加）

〈<https://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/uehara001.pdf>〉

平成 6 (1994) 年

・上原和「逍遙歌 餞けの詩稿—高砂周遊の歌のこと—」『芝蘭—台北帝国大学予科創立五十周年記念誌—』(台北帝国大学予科創立五十周年記念誌編集委員会、平成 6 年 6 月 20 日刊) 126～130 頁(127 頁に長谷場義久氏「現代の高校生に歌いつがれた逍遙歌」あり。)

平成 11 (1999) 年

・「逍遙歌 (高砂周遊の歌) 岩村光介・上原和・松村一雄合作、東 藤子作曲 (昭和 18 年作)」『台北帝国大学予科 第 1 部 寮歌集 第 2 部 よもやま話』(台大予科同窓会 蘭香会、平成 11 年 9 月刊) 16 頁(松村氏は当時台大予科国語担任教授、? ～1981)

・楽譜「(高砂周遊の歌) 台北帝国大学予科 岩村光介・上原和・松村一雄合作、東藤子作曲 (昭和 18 年作)」同書 17 頁(東藤子氏は台大予科哲学担任教授東日出男氏 (1914～ ? ) 令室、「高砂周遊の歌」の最初の作曲者。)

・東藤子「高砂周遊の歌」同書 39 頁

・長谷場義久「蘭花草創の頃」同書 39～40 頁

・上原和「逍遙歌「高砂周遊の歌」について—さらに母校台湾大学において歌い継がれんことを—」同書 54～57 頁

・斎藤信彦 (1925～)「台北帝国大学予科「逍遙歌」の周辺」同書 61～63 頁(斎藤氏は台大予科 2 回医類修了、「高砂周遊の歌」の三回目作曲者。「高砂周遊の歌」は三回作曲された。二回目のことは上原前掲「逍遙歌 餞けの詩稿—高砂周遊の歌のこと—」129 頁上段参照。)

平成 12 (2000) 年

・岩村光介 (1922～2000)『師と友と歌と—私の青春日記—』(私刊本、平成 12 年 8 月 30 日刊)(岩村氏は「逍遙歌 高砂周遊の歌」の同氏に所謂「原逍遙歌」作詞者(後掲 3 (3) 参照。)。同書は同歌成立過程をめぐる上原氏見解との比較等が詳細に記載されており、同歌検討には最も貴重な著作である。岩村氏は同書刊行後まもなく同年 11 月に逝去された。同氏には「岩村蓬」の筆名で「知られざる戦時台湾を描いた日記体戦争文学」の『草の絮』(くさのわた、木精書房、平成 8 年 2 月 20 日刊)がある。また、岩村氏が作詞者の一人とされた庄司義親氏は台大予科二回理農類修了、台大理学部に進学、昭和 20 年 12 月 8 日台北で早世。なお、中根嘉雄(台大予科二回文科修了)「青春と寮歌——東洋の小パリ・台北の日々」『台湾協会報』第 574 号(平成 14 年 7 月 15 日刊)第 2 面、「回想の台北①」同第 634 号(平成 19 年 7 月 15 日刊)第 4 面に岩村氏や「逍遙歌 高砂周遊の歌」のことが記載されている。)

平成 13 (2001) 年

・上原和「台湾語による「華麗島周遊の歌」がさらに永遠に歌い継がれんことを」『台北帝国大学予科創立六十週年記念文集 (芝蘭六十年 台北帝国大学予科創立六十週年記念 蘭香会)』(平成 13 年 1 月刊。2001 年 1 月 13 日前夜祭於北投熱海大飯店及び同年 1 月 14 日記念祭於台北国賓大飯店での配布冊子)

### 3 台北帝国大学予科 逍遙歌（高砂周遊の歌）歌詞の変遷過程

(1) (現行) 台北帝国大学予科 逍遙歌（高砂周遊の歌）(昭和 41 年時点)

岩村光介・上原 和・松村一雄・庄司義親 合作、斉藤信彦 作曲

#### 1、南の海の色冴えて

燕は北へ帰りけり  
朱欒（ざぼん）花咲く丘に来て  
仰げば深き青空の  
まほら流るる白雲に  
遥（はる）けき旅を恋うるかな

#### 2、春日かぎろういざご路を

ゼーランジャ城訪い来れば  
御朱印船の夢のあと  
戦の庭は草萌えて  
海藻（あまも）を干せる磯の辺に  
ひとと紅し佛（ぶつ）桑（そう）華（げ）

#### 3、咽（むせ）ぶ胡弓（こきゅう）の音（ね）に暮るる

古都台南の夕まぐれ  
媽（ま）祖（そ）廟（びょう）の庭苔むして  
雨に散りゆく梅檀（せんだん）は  
うす紫に匂いつつ  
春の愁（うれ）いを分つごと

#### 4、杵（きね）搗く（つく）唄を懐かしみ

鳶の吊橋揺り行けば  
夕（ゆう）星（づつ）しるき山蔭の  
草藉（し）く庭の花むしろ  
濁酒を酌みて舞い遊ぶ  
今宵（こよい）蕃社（ばんしゃ）の粟祭り

#### 5、明日越え行かむ峯の背に

オリオン寒き霧社（むしゃ）の宵  
かなしき伝え偲びつつ  
廢墟の蕃社（むら）にたたずみて  
夜霧流るる萱原に  
風の奏（かな）づる悲歌聞きぬ

#### 6、湯の香灰（ほの）かに立ち迷う

北投（ほくと）の谷の夕べかな  
入日に映ゆる相思樹の  
山路に独りたたずめば

紫煙る七星の

尾根（おね）霧（き）らい立つ春の虹

7、十字架（クルス）は草に埋れて

訪う人もなき丘の上

夕べ小暗（おぐら）き螢火の

榕樹の闇に燃ゆるとき

ふるさと恋うる魂（たま）なれや

遠く流るる星ひとつ

8、さい果ての地ぞ南（みんなみ）の

鵝鑾（がらん）鼻（び）岬人絶えて

蔓（つる）花（ばな）朱（あか）き岩蔭の

灼（や）くる真砂（まさご）路（じ）踏み行けば

海紺青（こんじょう）にかがよいて

沖にしぶける七つ岩

9、あゝ幾山（さん）河（が）越（こ）えゆかば

わが憧れのいえむ日ぞ

みどり色濃き相思樹の

南の島に渡り来て

友と語りて野に仰ぐ

雲白き日の嶺さびし

\*\*\*\*\*

(2) 逍遙歌（高砂周遊の歌）（昭和 19 年 9 月時点）

（昭和 18（1943）年秋以降上原和氏がいくつかの節を書き足して、台北帝国大学予科教  
授松村一雄氏に提出したものに、松村氏が手を加え、昭和 19（1944）年 9 月上原氏の離  
台、海軍航空隊入隊に当たり、同氏に手渡したもの。ここで初めて「高砂周遊の歌」の副  
題が書き加えられた。）

逍遙歌（高砂周遊の歌）

岩村光介・上原和・松村一雄 合作、東藤子作曲（昭和 18 年作）

1、欠

2、春日かぎろういざご路を

ゼーランジャ城訪い来れば

御朱印船の夢のあと

戦の庭は草萌えて

海藻（あまも）を干せる磯の辺に  
ひとと赤し仏（ふつ）桑（そう）華（げ）

3、むせぶ胡弓（こきゅう）の音（ね）に暮るる

古都台南の夕まぐれ  
聖廟（びょう）の庭苔むして  
雨に散りゆく梅檀（せんたん）は  
うす紫に匂いつつ  
春を惜しむに似たるかな

4、欠

5、杵（きね）搗（つ）く唄を懐かしみ

蔦の吊橋揺り行けば  
夕（ゆう）星（づつ）しるき山陰の  
草藉（し）く庭の花むしろ  
濁酒を酌みて舞い遊ぶ  
今宵（こよい）蕃社（ばんしゃ）の粟祭り

6、明日越え行かむ峯の背に

オリオン寒き霧社（むしゃ）の宵  
かなしき伝え偲びつつ  
廃墟の蕃社（むら）にたたずみて  
夜霧流るふ萱原に  
風の奏（かな）づる悲歌聞きぬ

7、阿里山 [未作成]

8、北投 [未作成]

9、いや果ての地ぞ南（みんなみ）の

鵝鑾（がらん）鼻（び）岬人絶えて  
茨（いばら）花咲く岩陰の  
白き砂（いさご）路（じ）踏み行けば  
海紺青（こんじょう）にかがよいて  
沖にしぶける七つ岩

10、ああ幾山河（さむが）越（こ）えゆかば

わが憧れのいえむ日ぞ  
みどり色濃き相思樹の  
南の島に渡り来て  
友と語りて野に仰ぐ  
雲白き日の嶺あおし

\*\*\*\*\*

(3) 原逍遙歌（昭和 18 年 9 月時点）

（昭和 18（1943）年 5 月岩村光介氏が歌詞制作を開始し、台北帝国大学予科教授松村一雄氏の助言を受けて改作を繰り返した上、同年秋学徒出陣を控えて松村氏に「最終稿」として手渡したもの。岩村氏のいう「原逍遙歌」とでも称すべきもの」。この後、歌詞制作を上原和氏が引き継ぐこととなった。）

逍遙歌

岩村光介作詞

1、南の海の色冴えて

燕は北へ歸りけり  
ザボン花咲く丘に来て  
仰げば深き青空の  
まほら流るゝ白雲に  
はるけき旅を戀ふる日よ

2、春日かぎろふいざご路を

赤嵌城に来て見れば  
遠く祖先の夢の跡  
いくさの庭は草萌えて  
うららかすめる魚池の邊に  
ひともと咲きし佛桑華

3、湯の香灰かに立ち迷ふ

北投の谷のゆふべかな  
入日に映ゆる相思樹の  
山路にひとり佇めば  
紫けぶる七星の  
尾根霧らひ立つ春の虹

4、咽ぶ胡弓の音をとめて

古都の夕べをさ迷へば  
音なくなく散れる梅檀の  
うすむらさきの雨の下  
眉うら若き乙女子は  
春の愁に沈むごと



5、十字架は草に埋れて

訪ふ人もなき丘の上よ  
ゆふべ小暗き螢火の  
榕樹の闇に燃ゆるとき  
ふるさと戀ふる魂なれや  
遠く流るゝ星ひとつ

6、あゝ幾山河こえ行かば

わが憧れのいえむ日ぞ  
みどり色濃き相思樹の  
南の島に渡りきて  
友と語りて野に仰ぐ  
雲白き日の嶺さびし

\*\*\*\*\*

【参考 1】 下道郁子氏関係論稿

・下道郁子「旧制台北高等学校の教育と音楽活動：多文化共生を目指した教養教育」『東京音楽大学研究紀要』第 35 巻（平成 23 年 12 月 10 日刊）1～23 頁（「東京音大リポジトリ」にあり。）

〈[http://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii\\_20170922165450.pdf?id=ART0009841925](http://ci.nii.ac.jp/els/contentscinii_20170922165450.pdf?id=ART0009841925)〉

・下道郁子「七大学をめぐる歌 “獅子頭山に・創業歌椰子の葉”」『U 7』vol.47 January（社団法人学士会、平成 25 年 1 月刊）62～67 頁

【参考 2】 台北帝国大学予科関係歌

・台北帝国大学予科創業歌「椰子の葉茂る」（昭和 16 年）

〈<https://www.youtube.com/watch?v=hIE-TG3C8WM>〉

〈<http://www5f.biglobe.ne.jp/~takechan/taidaisougyouka.html>〉

〈[https://blogs.yahoo.co.jp/yhakrymd/71266823.html?\\_ypsp=5Ym15qWt5q2M5qSw5a2Q44Gu6JGJ](https://blogs.yahoo.co.jp/yhakrymd/71266823.html?_ypsp=5Ym15qWt5q2M5qSw5a2Q44Gu6JGJ)〉

・台北帝国大学予科送別歌「しずもり深き相思樹の」（昭和 20 年 4 月）

〈[https://www.youtube.com/watch?v=23M\\_VGbzBcE](https://www.youtube.com/watch?v=23M_VGbzBcE)〉

【参考 3】 丹野義彦氏 HP「台北の旧制高校を歩いてみよう」（平成 29 年 10 月 21 日追加）

・台大予科検討上貴重なサイトとして、東京大学総合文化研究科教授丹野義彦氏の HP「丹野研究室」〈<http://park.its.u-tokyo.ac.jp/tanno/>〉中の「台北の旧制高校を歩いてみよう 絵

解き 地図と写真で歩く旧制高校」（平成 28 年 7 月 21 日アップ）参照。

〈 <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tanno/Taipei%20Campus.pdf#search=%27%E5%8F%B0%E5%8C%97%E3%81%AE%E6%97%A7%E5%88%B6%E9%AB%98%E6%A0%A1%E3%82%92%E6%AD%A9%E3%81%84%E3%81%A6%E3%81%BF%E3%82%88%E3%81%86%27>〉

・今春刊行の天野郁夫氏『帝国大学—近代日本のエリート育成装置—』（中公新書、平成 29（2017）年 3 月 25 日刊）54～60 頁に城大、台大関係記載あり。

【参考 4】『白線帽の青春 写真図説◆旧制高等学校 西日本篇』（国書刊行会、昭和 63 年 12 月 10 日刊）紹介（平成 29 年 12 月 17 日追加）

台北帝国大学予科関係については、『芝蘭—台北帝国大学予科創立五十周年記念誌—』（台北帝国大学予科創立五十周年記念誌編集委員会、平成 6 年 6 月 20 日刊）が詳しいが、その前に出た『白線帽の青春 写真図説◆旧制高等学校 西日本篇』（国書刊行会、昭和 63 年 12 月 10 日刊）所収の「椰子の葉茂る学舎に 台北帝大予科」（331～342 頁）は、多数の写真を掲載していて貴重である。なお、台北高等学校については、同書 275～316 頁に「獅子頭に雲みだれ 台北高等学校」が掲載されている。

【参考 5】「昭和考古学とブログエッセーの旅」「台北帝国大学の歴史 前・中編【昭和考古学】」紹介（平成 30 年 12 月 2 日追加）

下記は台北帝国大学予科研究にも極めて貴重なものである。

・ブログエッセイスト BE のぶ氏「昭和考古学とブログエッセーの旅」

〈<https://parupuntenobu.hatenablog.jp/>〉

・2018 年 2 月 4 日 台北帝国大学の歴史 前編【昭和考古学】（台大予科を掲載）

〈<https://parupuntenobu.hatenablog.jp/entry/taihoku-imperial-university-history>〉

・2018 年 2 月 16 日 台北帝国大学の歴史 中編【昭和考古学】

〈<https://parupuntenobu.hatenablog.jp/entry/taiwan-university-and-taihoku-imperial-university2>〉

（了）